

バチカン、よりよいミサの捧げ方、あずかり方のためのマニュアルを準備
カニサレス枢機卿、ミサは見せ物に陥ることなく、人を感動させるべきである。

ローマ、2013年1月16日 (Zenit.org)

典礼秘跡省は、司祭が適切にミサを捧げ、信徒がよくミサに参加できるための一助となる小本を準備している。昨日、ローマにおいてアントニオ・カニサレス枢機卿が、スペインのバチカン駐在大使館において「第二バチカン公会議以後のカトリックの典礼：継続と発展」という題で行った講演の中でそれに触れた。「この小本は、よりよくミサを捧げ、ミサに参加することを助けるためのもので、今年の夏に発行できればと期待している」と言う。枢機卿は講演の中で、第二バチカン公会議が典礼に与えた重要性を繰り返し触れ、「典礼の刷新は、教会の伝統との断絶としてではなく、伝統の中で理解されねばならない」と強調した。継続するものを軽視することでも、逆にすべてを公会議以前の状態に凍結することも断絶を意味する。

枢機卿は、公会議の最初の公文書、『典礼憲章』が典礼に与えた重要性を特別に指摘した。典礼のなか、「とりわけミサの犠牲の中で我々の贖いが行われる。・神はある一定の仕方では礼拝されることをお望みで、我々はそれを勝手に変更する立場にはない」と。刷新された教会とは、単なる組織の改革によるものではなく、典礼からの改革として理解されるべきである。と言うのは、典礼から救いの業が行われるからである。

典礼について話すとき、公会議の文書の次の言葉を忘れてはならない。「キリストは常に自分の教会とともに、特に典礼行為に現存している。キリストはミサの犠牲のうちに現存している。『かつて十字架上で自身をささげた同じキリストが、今、司祭の奉仕によって奉獻者として』司祭のうちに現存するとともに、また特に聖体の両形態のもとに現存している」(『典礼憲章』7)。

典礼の目的は「神の礼拝と人間の救いで、それは我々が作り出すものではなく、教会生活の源泉であり頂点である」と強調した。

典礼秘跡省の長官は、見せ物的なミサのような典礼の規定に反するミサを批判し、他方、沈黙の時をもつことを誉めた。沈黙の時は「行動的な参加」であり、司祭と信徒にイエスキリストと心中で話すことを可能にし、言葉の横暴を防ぐからである。言葉の横暴はしばしば司祭が主役になろうとすることから生じる。正しい態度は、「『私は衰え、メシアが栄えねばならぬ』と言った洗礼者聖ヨハネの態度である」と言う。

さらに、公会議は対面ミサについては話していないこと、祭壇上におられるキリストが重要であること、そのためにベネディクト16世はシスティン礼拝堂で背面ミサを立てられたが、それは対面ミサを廃するものではない、とりわけ聖書の朗読においては、と付け加えた。神秘の観念や、祭壇が東に向くというような小さな配慮の大切さ、さらにミサのいけにえという意味が忘れられないよう強調した。

パナマのバチカン駐在大使が典礼における土着の文化の役割について質問をしたが、それに答えて「公会議が典礼の土着化について話している」こと、「適切な多様性」が原則を曲げることになってはならないと言う。そして、スペイン(サンタ・フェ)での経験を紹介した。枝の主日、ジブシーのミサの中で一人のジブシーの若者がフラメンコの仕方で「神の子羊」を歌うのを聞いた。それは「心の底から訴えるような叫び」で「全会衆の心を動かしミサに参加させた」と言う。

また、多くの教会で聖櫃が脇祭壇や脇の礼拝堂に安置されていることによって、「聖櫃が消え去り」、人々がミサの前に平気でおしゃべりし、ふさわしい準備なしにミサに参加しているのではと苦言を呈した。

ルフェーブル司教の会について、ベネディクト16世が解決の糸口を提案したが、彼らからの答えはまだ届いていないこと、伝統がピオ12世の時代でとまっていると考えることも断絶を意味すると指摘した。